

サウジアラビア、ナイミ氏からファリハ新大臣への石油大臣交代を発表

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所
常務理事 首席研究員
小山 堅

5 月 7 日、サウジアラビアにおいて、サルマン国王の勅令に基づく、大規模な内閣改造と閣僚人事が発表された。その中で、世界的に最も高い注目を集めたのが石油相人事であった。既に 20 年を超える閣僚経験を有し、国際石油市場において最も知名度の高い大臣であったアリ・ナイミ氏がその任を解かれたのである。

ナイミ氏は、1935 年生まれ、80 を超える年齢であるが 1995 年にサウジアラビアの石油大臣に任命されて以来、今日までサウジアラビアの石油政策運営の中心に座して活躍し、国際石油市場で最も著名な人物の一人であり続けてきた。国営サウジアラムコの前身であるアラムコ入社が 1947 年、それ以来同社でのキャリアを重ね、1983 年にはサウジアラムコ CEO に就任、1995 年には前任ヒシャム・ナーゼル氏を引き継いで石油大臣となり、以来、今般の交代に至るまで 21 年あまり世界最大の石油輸出国であり、OPEC の盟主であるサウジアラビアの石油政策の「顔」であり続けてきた。

同氏の大臣任期中には、アジア通貨危機を端とする 90 年代末の原油価格暴落、2003 年のイラク戦争、2004 年以降の原油価格上昇期、2008 年の原油 140 ドル突破、リーマンショック後の 30 ドル台への急落、「アラブの春」以降の中東情勢の流動化、2011 年から 2014 年前半まで続いた原油 100 ドル時代、100 ドル原油を受けた米シェールオイル生産の拡大とそれによる需給軟化、サウジアラビア主導の市場シェア戦略展開の下での原油価格急落と低価格推移、等々、国際石油市場には大きな変化・変動があり、同氏はサウジアラビアの石油大臣としてそれらに対処・対応、市場と向き合ってきた。市場への対応・向き合い方・市場とのコミュニケーションの巧みさが増すに連れ、同氏の言動は国際石油市場関係者の注目の的となり、時として同氏を国際石油市場におけるグリーンспан氏(元・米 FRB 議長)にも擬えるような声も聞かれるほどであった。

なお、ここ数年は、ナイミ氏が石油大臣の任から離れたいとの考えを持っているのではないかと、との観測が流れており、いずれかのタイミングでの大臣交代はありうる、と見る向きが多かった。その意味では、今回の大臣交代は全くのサプライズというわけではないともいえる。しかし、今回の交代は、急遽の発表によるものであったこともあり、世界の主要メディアでも大きく取り上げられるニュースとなって世界を駆け巡った。他方、今回の大臣交代は、大規模な内閣改造の中での多数の人事交代の一つとして発表されている。

あくまでも筆者の個人的な「感傷」ではあるが、かくも長きにわたって世界の石油市場と原油価格問題の話題の中心であった同氏の引き際としては、もう少し華やかさが付きまとうものであっても良かったのではないかと、との印象もある。

もちろん、今日でも原油価格問題が世界経済・国際政治の中心的話題の一つである以上、より重要なのは、サウジアラビアの石油大臣交代が今後どのような意味を持つのか、ということになる。後任となったファリハ大臣は、早速、サウジアラビアの「安定的な石油政策は維持される」との趣旨の発言を行っている。その点において、まずは当面、現行のサウジアラビアの石油政策に大きな変更は無いと見て良いだろう。すなわち、原油価格引き上げのために減産することは無く、むしろ市場の状況に応じてシェア重視戦略を維持する、ということになるだろう。ファリハ大臣も、ナイミ氏と同様にサウジアラムコの CEO や会長を歴任した石油市場経験豊富なベテランであり、その手腕・能力は高く評価されている。その意味も含め、大臣交代の前後でサウジアラビアの石油政策には一定の連続性が保たれることになるだろう。

ただし、最近のサウジアラビアの石油政策に関しては、従来にも増して、政権トップの意向が明確・直接に、そして色濃く影響する面があるとの識者の声も聞かれるようになってきている。現体制下において、サウジアラビアの政権中枢として世界でも注目を集めているのは、ムハンマド・ビン・サルマン副皇太子であり、4月17日にドーハで開催された主要産油国会合にあたっては、増産凍結合意の前提条件としてはイランの参加が不可欠、とするムハンマド副皇太子のスタンスが大きな影響力を持ったのではないかと指摘する見解も石油市場関係者の中にある。なお、今回の大規模な内閣改造・閣僚人事そのものも、同副皇太子が主導する、サウジアラビアを石油依存国家から脱却させ、経済構造の多様化を目指す「ビジョン 2030」を実現していくための布石の一つ、と見られる。ちなみに、従来の石油鉱物資源省が改変され、エネルギー工業鉱物資源省へと改称され、石油だけでなく、エネルギー・電力・工業も所管することになった。ファリハ大臣はその長となる。

ファリハ大臣はムハンマド副皇太子と密接な関係を持つとされており、今後新しい体制の下で、どのような政策・戦略がとられていくことになるのか、大いに注目していく必要があるだろう。その際には、純粹に、石油・エネルギーのマーケットや市場という観点における政策だけでなく、場合によるとより地政学・国際関係という大きな観点からの政策・戦略が影響を及ぼすのではないかと、指摘する見解もある。特に、その点では、イランとの関係や対イラン政策との兼ね合いも注目されることになるだろう。

次回 OPEC 総会は 6 月 2 日にウィーンで開催され、ファリハ大臣の OPEC デビューとなる。変化を続ける国際石油情勢、中でも世界の需要動向、米国を中心とする非 OPEC 生産動向、イランの市場復帰、産油国での供給支障等に対応し、サウジアラビアがどのような政策スタンスで臨むのか、世界の注目が集まることになるだろう。

以上